

一八八四年九月十四日(日)

タクール、ドツキネーシヨル南神寺ドツキネーシヨルにおいて、ナレンドラなど信者たちと共に

智と無智を越える——シャシャダルの無味乾燥した智識

タクール、聖ラーマクリシユナは昼食の後、信者たちといつしよに部屋で休息しておられる。今日は、ナレンドラ、バヴァナートをはじめとする信者たちがカルカッタから来ている。ムクジエー兄弟、ジュニヤーン氏、若いゴパール、年長のカーリーたちも来ていた。コンナガルから三、四人の信者が来ている。ラカールはバララムといつしよに聖プリンダーヴァンに行っているが、熱を出して寝ているという知らせがあつた。今日は日曜日で、一八八四年九月十四日、黒分十日目。ベンガル暦一二九一年、バッドロ月三十日。

ナレンドラは父の死後、母と弟妹たちを養うために、夜も日もなくかけずり廻っていた。その上、法律の試験を受ける準備をしている。

ジュニヤーン氏は四つの学位を持ち、政府の役人をしている。彼は十時か十一時ころ来た。

聖ラーマクリシユナ「(ジュニヤーン氏を見て) おやおや、突然、ジュニヤーナ智識の目が覚めた!」(訳註、ジュ

ニヤーナとは智慧、智識の意)

ジュニヤーン氏「はははははは、智識の目覚めとは、たいへん幸運なことでございます」(訳註、智識の目覚めはかなりの幸運が重なって起こることであるが、今日、タクールにお会いするという幸運に恵まれたことを含めて言った言葉)

聖ラーマクリシユナ「あなたは智識だが、無智はどうした？　そうそう、智識のあるところに無智があるんだったつけ！　ヴァシシユタ様はあれほどの智者だったが、息子が死んだとき大声で泣きなすった！　だからあんたも、智と無智を飛び越えなさいよ。無智のトゲが足に刺さっている——それを抜くために智識のトゲが要る。抜いてしまえば、二つのトゲを両方とも捨てることだ」(訳註、ヴァシシユタ——「リグ・ヴェーダ」の讃歌の作者と伝えられる聖仙たちの一人)

〔無執着の社会生活——タクルの生誕地での大工の女たちの仕事振り〕

「この世は、幻の幕。だと智者は言う。智と無智を飛び越えた人は、遊び小屋。だと言いなさる！　その人はこう見るんだよ——神ご自身が、生き物、人間、世界、この二十四の存在原理すべてになつていなさると！

あの御方をつかんだ後で、世間で暮らすこともできる。そのときは、すべてに無執着でいられる。郷里で大工の家の女たちを見た——杵で脱穀している。片方の手で穀物を混ぜ返し、片方の手で赤ん坊に乳をやっている。その上、客とおしゃべりまでしている——『お前さんとこにはニアナ貸しがあ

るよ、返していっておくれ」

だが、十二アナ分(75%)の心は手の上にあるんだよ——手の上に杵が落ちてケガしないように。

十二アナ(75%)の心を神に向けておいて、四アナ(25%)分でこの世の仕事をしなさい。(十六アナ——タカ、つまり一〇〇%)

学者<sup>パンデクト</sup>シヤシヤダル氏のことを信者たちにお話しになった。「退屈な人だね、ただ無味乾燥した智識や分別のことばかり話している。(訳註——タクールはシヤシヤダルが真剣で誠実だったので大好きだったが、信愛の甘露がないのが不満だった。ベンガル人はその時頭に浮かんだことを率直に話すので、日本人には理解し難い面がある) 永遠(不動)を覚<sup>ニデイヤ</sup>つて活動<sup>リーライ</sup>の世界に住み、いつでも活動の世界から永遠不動へ行くことのできる人こそ、熟した智慧、熟した信仰を持っているんだよ。

ナーラタたちは、ブラフマン智を得た後で信仰を持っていた。これが覚<sup>ウイニヤ</sup>智<sup>ニヤ</sup>というものだ。

ただの無味乾燥した融通<sup>ゆうずう</sup>のきかない智識! ——ありやあ、安っぽい花火みたいなものだ。いくらカパチパチと火花が出て、それつきりでおしまい。ナーラタやシユカデーヴァたちの智慧は、高価な仕掛け花火のようだよ。火花が上がってちよつと休み、また新しい色模様の火花が出てちよつと休んで、またまた新しい火花が燃え上がる! ナーラタやシユカデーヴァたちは、あの御方に愛を持っていた。愛はサッチダーナンドをたぐりよせる縄だ」

〔タクール、聖ラーマクリシュナ、バクル樹台<sup>タ</sup>へ——ジャウタラから半三昧で〕

昼食の後、タクールは少しお休みになった。

バクル樹の根もとにベンチのように坐れる場所があつて、そこに数人の信者がいて、世間話をして  
いる——バヴァナート、ムクジュー兄弟、校長、若いゴパール、ハズラーの面々である。タクールは  
ジャウタラに行かれる途中でここに寄つて、一度お坐りになった。

ハズラー「若いゴパールに」この方にタバコを差し上げて下さい」(訳註、タバコ＝フッカ／水タバコ)  
聖ラーマクリシュナ「ハハハハ、お前が吸いたいからそう言うんだろう」(一同笑う)

ムクジュー「(ハズラーに) あなたはこのお方から、ずいぶんお学びになったのでしょうね」

聖ラーマクリシュナ「いいや、このお方は(ハズラーのこと)、子供のころからずっと今みたいな心境  
なんだよ」(一同大笑)

タクールがジャウタラから帰つてこちらの方へ来られるのを、信者たちは見ていた。半三昧で、酔つ  
たような足取りで歩いておられた。部屋に着かれたときは、平常にお戻りになった。

ナランに対するタクールの思いやり——コンナガルの信者たち——聖ラーマクリシュ  
ナの三昧とナレンドラの歌

タクールの部屋には大勢の信者が集まつていた。コンナガルの信者たちに交じつて、一人の修行者  
が初めて来ていた——五十才くらいの年令<sup>とし</sup>だろう。内心、自分の学問を鼻にかけているような態度が  
みえる。何かと話すうちに、こんなことを言った——「海をかきませる前には、月はなかったという

んでしようか？　こういうことを、誰か説明できる人がいるんでしようかねえ？」(訳註——乳海攪拌のインド神話)

校長「はははは、大宇宙が存在しないときに、大実母<sup>マ</sup>は頭蓋骨のネックレスをどこで見つけたんでしようねえ？」

修行者「(ムツとして)——そんな関係のないことをおっしゃる」

部屋のなかに立つておられたタクールが校長に、突然おっしゃった。——「あれが来たよ——ナラ<sup>ン</sup>が」(訳註、ナラン——ナラヤンのこと)

ナレンドラがベランダでハズラーたちと話をしていた。その議論する声が部屋まで聞こえてくるのである。

聖ラーマクリシュナ「よくあんなにしゃべるねえ！　今、家のことで大そう困っているのに——」

校長「はあ、そうでございますねえ」

聖ラーマクリシュナ「『禍<sup>わざわい</sup>を転じて福となす』と言っていたね。ええ？」

校長「はい、精神的に非常に強いものを持っておりますから——」

年長のカーリー「弱いところなんか、ありますか？」

タクールはご自分の場所にお坐りになった。

コンナガルから来た信者の一人がタクールに申し上げます——「先生、この人(さっきの修行者)は、あなた様にお会いするために来られたのです。何か質問があるそうでございます」

その修行者は、体と頭をまっすぐにして坐っている。

修行者「先生、解脱の方法をおたずねいたします」

〔神を見る方法——師の言葉を信ずること——いつまで聖典に頼っているか〕

聖ラーマクリシュナ「師の言葉を信じて、師のことばをしっかりと守って行けば、至聖をつかむことができる。垂れ下がった糸をたどっていくと、織物（本体）がつかめるからね！」

修行者「神は見るのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方は俗心ではわからない。女と金に執着する心がわずかでも残っている間は、あの御方に触れることはできない。だが、純粹な心、純粹な知性では、見ることも触れることもできる。つまり、そういう心や知性には、執着のカケラもないんだからね。純粹な心、純粹な知性と、それから純粹な自我——これは一つのものだ」

修行者「しかし、経典にはこう書いてあります——『言葉はむなしくはね返り、心もはるか届かぬ』と。つまりあの御方は、言葉で説明することも、心で理解することも不可能だと——」

聖ラーマクリシュナ「あ、待った、待った。修行をしなげりや、経典のほんとの意味は理解できないんだよ。シッデイ、シッデイ、と言っただけではどうにもなるまい？ 学者連中はペラペラと詩を暗誦するが、それで何の役に立つ？ シッデイを体に塗りつけたところで酔いやしない——飲むことだ。（訳註、シッデイ——シヴァ神に捧げる飲み物で、気分を高揚させる麻薬性、中毒性の成分を含んでいる）

牛乳にはバターがふくまれている。牛乳にはバターがふくまれている。と言っているばかりではどうにもならないだろう？ 凝り乳にしてかき混ぜるんだよ。そうすりゃバターができる！」

修行者「バターをつくる話——それも皆、経典に書いてあることですよ」

聖ラーマクリシュナ「お経にある話を、しゃべったり聞いたりしただけでどうなる？ その通りになることが必要なんだよ。曆表に雨が降ると書いてあっても、曆を絞ったって一滴も落ちてきやしない」

修行者「バターをつくる——あなたは自分でおつくりになりましたか？」

聖ラーマクリシュナ「わたしがそれをしようとしまいと——よけいな話だ。それに、こういうことを他人にわからせようとするのは、大そうむずかしいんだよ。誰かが、『ギーはどんな味がする？』と聞いたたら、『ギーは、ギーみたいな味だ』としか言いようがあるまいさ。(訳註、ギー——一度発酵させた乳からつくったバターで独特の風味がある)

こういうことを理解しなかったら、サードウと付き合うことがどうしても必要だ。

それがカバの脈か、それがピツタの脈か、それがヴァータの脈か……。これがわかるためには、ヴァイデア医者ののところに住み込むことが必要だ」(訳註——アーユルヴェドインド医学では、人間の体質は、カバ(空と風の性質)、ピツタ(火と水の性質)、ヴァータ(水と土の性質)の三つの要素の複合によりなるとされる。ヴァイデアはアーユルヴェドの医者)

修行者「他人といっしょに住むことを、煩わしがる人もあります」

聖ラーマクリシュナ「それは智慧を得た後、至聖をつかんだ後のことで、その前はサードゥのところにいかなければならぬだろ？」

修行者は黙っている。間もなく彼は熱っぽい調子で話し出した。

修行者「あなたがもし神を知っておられるなら、おっしゃって下さい——直接じかに神を見たのか、それとも感じとったのか、よかったら話してきかせて下さい。お嫌なら話して下さらなくても結構です」  
聖ラーマクリシュナ「(かすかに笑って) 何て言えはいいんだろ！ 暗示するよりほか、仕方ないんだがね」

修行者「でしたら、おっしゃって下さい！」

ナレンドラがいざれ歌をうたうだろう。ナレンドラが、「誰も、バカワジ(画面太鼓)を持ってこなかったのかい？」ときいた。

若いゴパール「マヒマーさんがあるけれど——」(訳註——マヒマー＝マヒマーチャラン)

聖ラーマクリシュナ「いや、あれの物は要いらないよ」

先ずコンナガルから来た信者の一人が、ドゥルバド(インドの古典的な歌)をうたった。

その間、タクールは修行者の様子を時々眺めておられる。やがて、ナレンドラはその歌い手と、歌と器楽について言い合いを始めた。

修行者「(歌い手に向かって) あんたも負けん気が強いねえ！ 何の必要があつて、そんな議論をするんですか！」



もう一人が議論に加わっていた。タクールは修行者に向かつて——「あんたさんは、この人のことは怒らないのかね？」とおっしゃる。

聖ラーマクリシュナはコンナガルの信者たちにおっしゃった。「この修行者は、いっしょに来たコンナガルの人たちとあまり仲が良くないようだね」

ナレンドラが歌をうたった——

主よ ああ わが日々は空しく過ぎゆく

希望の道をただ、日も夜も見つめて——

一八八七年四月九日に全訳あり

修行者は、歌をききながら深い禪定に入っていた。タクールは寝台の北側に、南向きに坐っておられる。時間は午後三時か四時ころ。西日が差ってきてタクールのお体に当たった。タクールは慌てて傘を持ってきて広げ、修行者の西側においた。彼の体に西日が当たらないようにとのお心づかいであつた。

ナレンドラは歌う——

泥にまみれし心もて

如何いかにして君を仰あおぎ呼ぶべき

燃えさかる火のなかに

わら草いれて如何いかになるらん

君は欠けることなき美徳の壺

まさに燃えさかる火の如ごとし

我、わら草の罪とびとは

仰あがぎ近づちかづくすべもなかりし

さはあれ、大罪も消ゆるといふ

称名の功德とくを人づてに聞きて

聖きよなる御名みかを唱えしとき

わが胸は喜よろこび悦びにおののきぬ

おろかにも過ぎし日々を

罪の下僕しもべとなりて暮らしぬ

今より我、いかに生なくべき――

聖なる御名みかに護まもられつつ

この罪深く浅ましき我を  
慈悲深くも御名おんの力により  
髪とり引きずりよせ給いて  
み足の下に護らせ給え――

ナレンドラたちへの教え――ヴェーダやヴェーダーンタはただヒントを与えるだけ

ナレンドラはつづけて歌う――

ああ 美しきかな 君の名よ

弱く貧しき者たちの避難所かくれが

甘露の雨のごと わが耳にふりそそぐ 永遠とわの生命いのちの君よ

わが宝はただ一つ 君の御名

とこしえの樂しき住処すみか

そを歌いたたえる者は 滅びざる命とならん

重く深きわが胸の苦悩を

たちまちに消し滅ぼすは

蜜のごとく甘き君の御名

君の御名の甘き響きで

わが胸は甘き安らぎに満つ

ああ わが心の主よ、至福の御名よ！

ナレンドラが、君の御名の甘き響きでわが胸は甘き安らぎに満つ、とうたったとき、タクールは三昧に入られた！ 入三昧のはじめにあたって、手の指、殊に親指が震えていた。コンナガルの信者たちは今まで、タクールの三昧を拝見することがない。タクールが黙ってしまわれたのを見て、彼らは部屋から出て行こうとした。

バヴァナート「あなた方、お坐り下さい。これはこの御方の入三昧境です！」  
コンナガルの信者たちは再び席についた。ナレンドラはまた歌う――

わが胸に君の御座つくらんと

昼も夜もはたらく我を

宇宙の主よ、あわれみて

いざここに訪ない給えや

タクールは、半三昧状態のまま寝台から下りてこられ、ナレンドラのお坐りになった。

おお、心の大空に 愛の満月ゆたかに昇り

おお、愛の海原 よろこびに満ちあふる

ジャヤ・ダヤー・マイー (恵みの御母に栄光あれ)

ジャヤ・ダヤー・マイー

ジャヤ・ダヤー・マイー!

ジャヤ・ダヤー・マイー——ベンガル語の発  
音は、ジヨエ・ドヤ・モエ

ジャヤ・ダヤー・マイー——これを聞くと、タクールはつと立ち上がって、再び三昧に入られた！  
かなり長い間たつてから、やや平常に戻られ、また床の敷物の上にお坐りになった。ナレンドラは  
（歌い終わって、タンプーラ（弦楽器）を元の場所に置いた。タクールはまだ、法悦にひたつておられる。  
その半三昧の状態のままでおっしゃった——「こりゃ、どういうことだろうね、マー。バターをとつ

て口の先までもってこいとは——。池にエサもまかずに、釣竿を垂れもせずに、誰かが魚をつかまえて手に持たせてくれというわけか！ 何もしないくせに！ マー、もう聞くものか—— 分別の話なんか。仕様のない奴らが、けつの穴に竹の棒をつっこみやがって！（インドの俗語でつまらないことをつべこべ言うこと）—— ああ、うつつうしい！ 振り落としてやろう。

アレは、ヴェーダや戒律きまりの向こうにあるんだ！ ヴェーダやヴェーダーンタのお経を読んで、あの御方がつかめるかい？

（ナレンドラに向かつて）—— わかるか？ ヴェーダや何かは、ただヒントを与えるだけなんだよ！」  
ナレンドラに、再びタンプーラを持つてくるようにとおっしゃった。タクールは、「わたしが歌う」とおっしゃった。まだ、法悦の気分から抜けておられない。タクールはお歌いになる——

私は悲しい、情けない——

あなたという母親がついていて

しかもハッキリ目覚めているのに

我が家に盗人が忍びこむとは

「マー！ どうしてあれこれ分別かんがえさせる？」タクールはつづけてお歌いになる——

こんどこそ私ははっきりわかった

それをよく知っている人から、この世の秘密を教わった

眠りは破られ、もう二度と眠りはしない

ヨーガに入つて常に目ざめている

マーよ、私はヨーガ三昧に入り

眠りを眠らせてしまったのだ

タクールは、「わたしはちゃんとわかっているよ」とおっしゃる——しかし、まだ半三昧状態である。

私はこの世の酒は飲まない

◦ジャヤ・カーリー(カーリーに栄えあれ)◦と言つて飲むは

永遠にして至福の甘露酒<sup>うまざけ</sup>

永遠のよろこびに酔う私を見て

人はただの酔っ払いだと思ふ

タクールは、「マー、分別のことなんか、もう聞かないよ」とおっしゃる。  
ナレンドラが歌う——

マーよ、ブラッママー梵女神よ

私を狂わせておくれ

智慧も分別も用はない

あなたの愛の酒で酔わせておくれ

マーよ、信者の心を盗むお方よ

あなたの愛の海に沈めておくれ

タクールはかすかに笑いながらこうおっしゃった——「マーよ、狂わせておくれ！ あの御方を智慧分別でわかるうとしても——経文をあれこれ解釈しても——つかめやしないさ」

コンナガルから来た歌い手の熟達した古典歌ドゥルパドをお聴きになって、タクールは大そうご満足の態である。歌手に向かつていねいにこうおっしゃる——「バブ、♪歎喜の女神♪を！ もひとつ歌って！」

(訳註、バブ——ベンガルで、ごく親しい人に愛情を込めて、♪お前♪と呼びかけるときに用いる言葉)

歌手「先生！ もう勘弁して下さい」

聖ラーマクリシュナ「(歌手に合掌して拝みながら) そう言わずにさ、バブ！ ぜひたのむよ！」



こうおっしゃって、ゴーヴィンダ・ラディカリーの野外劇で歌われていた、牧女<sup>ゴイビ</sup>プリンダの気持ちをうたった歌をおうたいになった。

ラーダーがこう言うのも無理はない

クリシュナのために眠<sup>ね</sup>られない

夜じゅう寝ないで覚<sup>さ</sup>めている！

腹を立ててもしょうがない！

バブ！ あんたはブラフマニー(大実母の一名)の息子だよ！ あの御方は、一人ひとりに宿<sup>とど</sup>っていないさるんだからね！ ほんとのことだよ。ある農夫が師匠に言ったとさ——『殴<sup>う</sup>つてでもマントラを授けてもらいます！』

歌手「ははははは、靴で殴<sup>う</sup>りますか」

聖ラーマクリシュナ「(師匠に対するように拝みながら笑って)それほどのこととはしませんよ」

そしてまた、前三昧状態になっておっしゃった。——「<sup>ブラフアルタカ</sup>初心者、<sup>サーダカ</sup>修行者、<sup>シッダ</sup>完成者、<sup>シッダ</sup>完成者のなかの<sup>シッダ</sup>完成者——あんたは<sup>シッダ</sup>完成者か？ それとも<sup>シッダ</sup>完成者のなかの<sup>シッダ</sup>完成者か？ いいよ、歌っておくれ」

歌手は楽器の調子をととのえて歌い始めた。

「シャブダ・ブラフマン（音のブラフマン）の喜び——マー、わたしか？ あんたか？」

聖ラーマクリシュナ「（前奏を聞いて）バブ！ それだけ聞いても嬉しくなるよ、バブ！」

歌は終わった。コンナガルの信者たちはあいさつをして帰って行った。修行者は合掌してタクルールを拜し、「ゴサマシ神師！ では、おいとま致します」タクルールはまだ半三味の境地で、マーと話しておられる。

（訳註、ゴサーイン——ヒンドゥー教で世俗を離れた修行者、聖者に与えられる称号。語尾のジーは尊敬の意を表す）

「マー！ わたしかい、あんたかい？ わたしが何をするって？ ——ちがう、ちがう、あんただよ。

いままで議論を聞いていたのはあんたかい——それともわたしかい？ いや、わたしじゃない——

（聞いていたのは）あんただよ！」

〔以前の話し——サードゥウがタクルールに教えたこと——タマス性のサードゥウ〕

タクルールは普通の状態に戻られた。ナレンドラ、バヴァナート、ムクジェー兄弟たちと話をしていらつしやる。さっきの修行者の話で——。

バヴァナート「アハハハハ、まあ、何て人物でしょうね！」

聖ラーマクリシュナ「タマス性の信仰者だよ」

バヴァナート「サンスクリットの詩を、ずいぶんよく暗誦できましたね」

聖ラーマクリシュナ「わたしは、ある人に言ったことがある——『あれはラジャス性のサードゥウだ。

ああいう人に食べ物やなんかをお布施して、何になる？』と。そしたら、或るサードゥウがわたしに教え

てくれたがね——「そんなことを言いなさるな！ サードウには三種類あるのです——サットヴァ性、ラジャス性、タマス性と——」その日からわたしは、あらゆる性格のサードウを認めるようになった」

ナレンドラ「アツハツハツハツハ、何ですか、象のナーラーヤナ(神)ですか？ すべてがナーラーヤナですからね」(訳註——象のナーラーヤナのたとえ話は一八八二年三月五日「不滅の言葉」参照)

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、あの御方自身が賢い人の姿になったり、バカな人の姿になったりして遊んでいなさるんだ。両方とも、わたしや拝みますよ。チャンデー(註)にあるが、『あの御方はラクシユミー(幸福の女神)。また、不幸な家にいる厄病神！』(バヴァナートに向かつて)これはヴィシヌス・ブラーナに書いてあるね？」

バヴァナート「はははは、いや、私はよく存じません。コンナガルの信者たちは、あなた様の三昧状態がよくわからなくて、部屋から出て行こうとしました」

聖ラーマクリシュナ「誰だい？ あんた方、お坐りなさい！」と言ったのは？」

バヴァナート「あれは私ですよ、アツハツハツハツ」

聖ラーマクリシュナ「お前は、拾って連れてくるのもうまいが、追い出すのもうまい」  
歌手とナレンドラが大論争をしたが、その話になった。

〔無抵抗主義と聖ラーマクリシュナ——ナレンドラたちへの教訓——サットヴァのタマス——ハリ〕  
〔称名は偉大〕  
Doctrine of Non-resistance and Sri Ramakrishna

ムクジエー「ナレンドラは容赦しませんでしたね」

聖ラーマクリシュナ「いや、ああいう性根が大事なんだよ！ これはサットヴァのタマスというんだ。人の意見にいつでも従わなけりゃならんのかい？ 売春婦に向かって、『いいよ、君の好きなようにしてくれ』なんて言うかね？ 売春婦の言葉を聞いていられるかい？ ラーダーが腹を立てたと言つて一人の友だちが、『ラーダーはえらそうに我を張つてる』と言つた。すると、プリンダはこう言つた。『あの人の我は誰のものかしら？ ラーダーの我は、あの御方だけのものなのよ。クリシュナの誇りが、あの人の誇りなのよ』」

こんどは、ハリの名の功德の偉大さについての話になった。

バヴァナート「ハリ(クリシュナ)の名を称えていると、私は体が空っぽになるような感じが致します」

(訳註——心配ことや束縛を感じなくて、心が安らかな様子を表している)

聖ラーマクリシュナ「罪を取り除いてくれるお方がハリなんだからね。ハリは、この世の三つの苦

悩を取り去つて下さる。(訳註、三つの苦悩——自然現象から受ける苦悩、他人や動物から受ける苦悩、精神的な要

因から生ずる苦悩)

それに、チャイタニヤ様デヒガがハリ称名をお勧めになつたし——だから、いいに決まつているよ。チャ

(訳註1) チャンディー——ドウルガー女神が悪魔マヒシャを倒すまでの物語『デーヴィー・マハートミヤ』のこと。

激しく怒る者を意味するチャンディーカーに由来しチャンディーと呼ばれる。

イタニヤ様デレリアはあんなにすばらしい学者で、その上、あの方は神の化身で——そういう方がこの称名を勧めなされたんだから、これはいいことに決まっている。(ニコニコして) 百姓たちが招待されて、こう聞かれた——『お前さんたち、アムラのチャツネを食べるかね?』すると連中はこう答えた——『金持ちの旦那方が食べなさるものなら、おれたちにも下せえまし。旦那方がずっと食べていなさるのなら、いいものに決まっているだ』と(一同大笑)(訳註、アムラのチャツネ——アムラ(あむら卵)の果実で作ったペースト状のソース)

〔シヴァナートに会いたい希望——マヘンドラの聖地巡礼の申し出〕

タクルは、「シヴァナート(シャーストリ)に会いに行きたい」と前から希望しておられた。それでムクジエーたちに、「一度、シヴァナートに会いに行こう。お前たちの馬車で行けば車賃は要らないわけだね!」とおっしゃった。

ムクジエー「かしこまりました。では、いつか日をきめて必ず参りましょう」

聖ラーマクリシュナ(信者たちに向かつて) そうだ、わたしらをライクしているだろうかねえ? あの連中(ブラフマ協会たち)は、形ある神を信仰している人たちをえらく非難しているが——」

マヘンドラ・ムクジエー氏は、聖地巡礼に行くことをタクルにお知らせした。

聖ラーマクリシュナ「ハハハハ、どうしてだい! 神への愛プレマの芽が出ないうちに行くのかい? 芽が出れば、そのあとは木になり、そして実がなる。あんたとはずいぶんいろいろ話をしたがね」

マヘンドラ「はあ、少し回って来たいと思いますので……。すぐ戻るつもりでございます」

ナレンドラの信仰——タクール、ジャドウ・マリツクの別荘でガウランガを思い  
三昧に入られる

午後——時間は五時になるところ。タクールは席を立たれた。信者たちは庭を散歩している。多く  
のものは、もう急いでお暇いとましなければならぬ時間だ。タクールは北のベランダでハズラーと話をし  
ていらつしやる。ナレンドラは近ごろ、グハ家の長男であるアンナダのところへ足繁しげく通っている。

ハズラー「グハ家の息子のアンナダは、きびしい苦行をしているそうですよ。ほんの少ししかもの  
を食べないそうです。四日に一度だけ米を食べるとか——」

聖ラーマクリシュナ「へえ、そうなのかい？　どんな装束のナーラーヤナがびつたりくるか、人  
それぞれさ」(訳註——どんな道を通って神しんに目覚め神に到達するかは、人それぞれの好みや性格によって違うから、  
人がどんな修行をしようかと批判することはできない、と言う意味)

ハズラー「ナレンドラがアーガマニを歌っていましたよ」  
(訳註)

(訳註2) アーガマニ——シヴァ大神の妃となったヒマラヤ王の娘ウマーが、両親のもとに里帰りした時に、ウマー  
の母親が娘を心配してうたった歌、ベンガル語ではアゴモニ。女神ドゥルガーもしばしばウマーと呼ばれ、ドゥル  
ガー・ブージャの祭に先だって、嫁ぎ先から帰ってくる娘を待ちわびる気持ちを込めて歌われる。

聖ラーマクリシユナ「(熱心な面持ちで)——どんなふうにな？」

キシヨリーがそばに立っていた。タクルルは彼に、「お前、具合はいいかい？」とお聞きになった。タクルルは西の円ベランダにいらつしやる。秋なので赫土色のフランネルの服を着ておられる。ナレンドラに向かって、「おまえ、アーガマニを歌ったのかい？」とおつしやりながら、円ベランダからナレンドラといつしよにガンガーの堤防に行かれた。校長もいつしよだった。ナレンドラは(アーガマニを)歌った——

よそ(シヴァ)の家でどんなにして暮らしているのか

ウマーよ、母さまに話しておくれ

ウマー——シヴァ神の妃

おおぜいの人がいるいる言うのをきくと

私は恥ずかしくて死にそうだ

ムコさんは火葬場の灰をまぶして

上機嫌で踊り歩いているそうな——

しかもお前までがいつしよになつて、黄金の肌に

灰をまぶして従いて歩くそうじゃないか

ムコさんは乞食してるそうじゃないか！

私はお前の母親として辛抱できない

こんど彼がお前を連れにきたら

娘のウマーは家にいないと言ってやるつもりだよ

タクールは立ち止まって聞いておられたが、聞きながら前三昧状態になられた。

まだ時間がある。お日さまは西の地平線近くにまだいらっしやる。タクールは前三昧状態である。このお方の片側には、ガンガーが北に向かって流れている。すこし前に満潮になったのである。西側は花園、右方は音楽塔ナハバトと五聖樹パンチャパティの杜が見える。タクールのそばにナレンドラが立つて歌っている。

夕方になった。ナレンドラはじめ信者たちは、ごあいさつをして帰っていった。タクールは部屋にお入りになって、宇宙ジャガット・ムーラの大実母の名を称え、瞑想していらっしやる。

ジャドウ・マリツク氏が寺の隣にある別荘に今日来ていた。別荘に着くとすぐ、タクールのところを使いを出して、こちらにお越し下さるようにとお願いした。

アダル・セン氏がカルカタから到着してタクールにごあいさつした。

〔信者たちとジャドウ・マリツク氏の別荘へ——聖ガウランガの気持ち〕

タクールはジャドウ・マリツクの別荘においでになるところだ。ラトウに、ランタンに灯をつけて



いっしょに行くようにとおっしゃる。

タクールはラトウを連れてお出かけになる。校長もついていこうとした。

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて) お前、どうしてナランを連れて来なかつたんだい？」

校長「わたくし、お伴してもよろしゅうございますか？」

聖ラーマクリシユナ「来るって？ だって、アダルや何かが部屋にいるじゃないか。——まあいい、おいで」

ムクジエーたちが道で待っていた。タクールは校長に向かつておっしゃる——「この旦那方もいっしょに来なさるのかい？ (ムクジエーたちに) さあさあ、いっしょに行きましょう。そのほうが早く帰って来れるだろ」

〔チャイタニヤ・リーラーの観劇とアダルの仕事のことをジャドウ・マリックと語る〕

タクールはジャドウ・マリックの応接間にお入りになった。立派な応接間である。真新しい家具、調度が置かれている。ペランダには灯火が輝いている。ジャドウは小さな子供たちとふざけながら、二、三人の友人といっしょに坐っていた。召使いが待つており、一人は手に大ウチワを持つて扇いでいる。ジャドウは上機嫌で笑いながら、坐ったままタクールにあいさつをし、長年の知<sup>しりあ</sup>己<sup>い</sup>のような態度をとっていた。

ジャドウはガウランガ(チャイタニヤ)の信者である。彼はスター劇場で、チャイタニヤ・リーラー

を観てきたところであった。そのことについて、タクールにお話している。新しい演出のチャイタニヤの遊戯リレーで、とても感激的だった、というようなことを話している。

タクールは楽しそうにその話をお聞きになりながら、時々、ジャドウの小さい息子の手をとってあやしていらっしやる。校長とムクジェー兄弟はタクールの傍に坐っている。

アダル・セン氏はカルカッタ自治行政機関の副議長の地位を得ようとして努力していた。その職分だと千タカの給料がとれるのであった。アダルは現在、副知事の地位にあるが、これは三百タカの給料であった。アダルはまだ三十才なのだ。

聖ラーマクリシュナ「(ジャドウに向かつて)アダルの希望はだめだったのかえ?」

ジャドウと彼の友人たちは、「アダルにはまだ、次の機会チャンスがありますよ」と言った。

しばらくするとジャドウは、「あなた、すこしあの御方の名を聞かせてくれないか」と言った。(訳註—ジャドウはタクールよりも年上で、しかも金持ちだったので、あまりていねいな言葉を使わなかった)

タクールはガウランガの歌をうたおうとおっしゃった――

私のガウルは踊ってる

シュリーヴァースの庭で 信者といっしょに

踊って キールタンうたってる

一八八四年七月三日に全訳あり

1884年9月14日(日)

次の歌――

私のガウルは宝<sup>たから</sup>玉

また次の歌――

ガウルはプリンダーヴァンの方をみつめ

両の目より涙はらはら落としぬ

聖なる歓びにガウルは至福の海に浸り

愛に笑い、泣き、踊り、歌う

森を見てはプリンダーヴァンと思い

海を見ては聖なるヤムナーと思う

ガウルは自分の足に頭を当てる

内(心)はクリシュナ、外(肉体)はガウル

また次の歌――

全てはクリシュナだから、自分の足をクリシュナの足として押んでいる

どうして私の肌はガウルに（白く）なったの？

ねえ、教えて、何が起こったの？

ねえ、お友達、夜明けにはまだまだ時間がある

なのに、夜明けのような朝の色

まだ空が白んでくるには早いというのに……

まだ、ドヴァーバラ・ユガ（訳註3）の神のリーラーは終わってはいないのに……

教えて？ 何が起こったの？

見るものすべて、カッコーや孔雀でさえもみんなキラリと光っている

どうしたの？ どうしたの？ 何で全てが光に包まれて見えるの？

たぶん、ラーダーがマトウラーに着いたのね

だから、体が光っているのよ！

（訳註3）ドヴァーバラ・ユガ——ヒンドウーの宇宙観で用いられる四つの周期的な時期ユガの一つ。四つの時期ユガとは以下の通り。

(1)サテイヤ・ユガ（クリタ・ユガとも言う）——ダルマ（正しい教え）が浸透している時期ユガ。

(2)トレーター・ユガ——ダルマが四分の三残っている時期ユガ。

(3)ドヴァーバラ・ユガ——ダルマが二分の一残っている時期ユガ。

(4)カリ・ユガ——ダルマが四分の一しか残っていない時期ユガ、現代はカリ・ユガと言われている。

ラーダーは芋虫のようだった。それで自分の色を変えたんだわ！

たった今まで真っ黒だったのに、見る見るうちに、ガウル(白色)になった！

ラーダーのことを想って想って、ラーダーになったのかしら？　なんてことかしら！

ラーダーラニーはラーダー・マントラを唱えない人に、彼女の輝く肌の色を与えるかしら？

マトウラーにいるのか、ナバドウィープにいるのか、私はさっぱりわからない

マハーデーヴァは、まだアドヴァイタにはなっていないのに

私の体はどうしてガウルに(白く)なったの？

バララーマは、まだニタイになっていないし

ヴィシヤカは、まだラーマナタになっていない

ブラツマはまだハリダースになっていないし

ナーラダはシュリーヴァーサになっていない

それに、ヤショーダー母さんはまだサチーになっていない

バライ兄さんがまだニタイになっていないのに

なのにどうして私だけ、こうしてガウル(白色)になってしまったの？

ナンダ父さんは、まだジャガンナータになっていないし

ラディカもまだガタダールになっていない

だけど、私はガウル(白色)になった！

どうして私の体はガウル(白色)になったの?  
(訳註4)

### ラカールのため——ジヤドウ・マリツク——ボラナーットの証言

歌が終わると、ムクジェー兄弟は別れを告げた。タクールもいっしょにお立ちになった。だが、半三昧状態である。ペランダに出られると、完全な三昧状態にお入りになった。ペランダには灯火が沢山ついている。この別荘の門番はタクールの信者である。彼は時々、タクールを自宅にお招きして、お食事を差し上げていた。タクールは立ったまま三昧に入っておられる。門番が来て、ウチワでタクールを扇いでいる。大それた大きなウチワである。

別荘の執事、ラタン氏が来てあいさつをした。

タクールは平常にお戻りになった。ナーラーヤナ！ ナーラーヤナ！と声高に叫びながら、彼等にあいさつをお返しになった。

(訳註4) チャイタニヤ(ガウランガ)はクリシユナの化身だと考えられていた。この歌はクリシユナとチャイタニヤを対比して歌われている。クリシユナ(カナイ)の肌の色は黒かったが、チャイタニヤはガウランガ(色白の身体をした人)またはガウルと呼ばれ、肌の色は白かった。クリシユナの養父はナンダ、養母はヤシヨード、兄はバラーマ(バライ)、生誕地はマトウラーなのに対して、チャイタニヤの父はジャガンナータ、母はサチー、兄はニタイ、生誕地はナバドウィープである。

タクールは信者たちといっしょに、神殿の表門のところまで来られた。ムクジエー兄弟がそこでお待ちしていた。

一方、アダルはタクールを探し回っていた。

ムクジエー「(笑いながら) マヘンドラさん(校長)はここへ来るために、仕事を休んだんですよ」  
 聖ラーマクリシユナ「(笑いながらムクジエーに) しょっちゅうこの人と会うようにおし……。そして話をおしよ」

プリエ・ムクジエー「この方は、今から私どもの先生になって下さるでしょう。あはははは……」  
 聖ラーマクリシユナ「大麻吸いは大麻吸いに会うと大よろこびする。アミールが来ても口をきかないが、落ちぶれ果てた大麻吸いに出会うと抱きついたりする」(一同笑う)(訳註、アミール——王族や身分の高い金持ちの回教徒)

タクールは境内の道を通って西に向かい、自室の方に歩いて行かれた。道々こんなことをおっしゃる——「ジャドゥは熱心なヒンドゥー教徒だ。バーガヴァタ(プラーナの一部)から、いろんなことを話す」

モニ(校長)はカーリー堂に入って礼拝してから、聖足水チャラナームリタを口に受けた。タクールも入ってこられた。マーを参拝アービヤなさるのである。 (訳註、聖足水——昔は聖者の御足を洗った後の水と言ったが、今は礼拝アービヤに使用した水を指し、礼拝終了後には皆にお下がりとして配られる。神のお御足チャラナから流れる甘露アムリタの意味がある)

夜も九時になった。ムクジエー兄弟はあいさつをして帰って行った。アダルと校長はまだ床に坐り

込んでいる。タクールはアダルを相手に、ラカールのことを話しておられる。

ラカールは今、プリンダーヴァンにいます。バララムといっしょである。彼が病気をしているという手紙がきていた。二、三日前にそのことをお聞きになったタクールは非常に心配されて、ちょうど昼食を召し上がっておられるときだったのが、「どうしよう！」とおっしゃってハズラーのところへかけ寄り、子供のようすすり泣いておられた。

アダルがラカールに書留を送ったのだが、受け取ったという手紙がまだ来ていない。

聖ラーマクリシュナ「ナランのところには手紙が来たそうだが、あんたにはまだ返事がこないのかい?」

アダル「ええ、まだ来ません」

聖ラーマクリシュナ「校長のところにも来たというのに——」

タクールが、<sup>「</sup>チャイタニヤの遊戯<sup>」</sup>を観劇に行くという話が出た。

聖ラーマクリシュナ「笑いながら信者たちに向かつて」ジャドウが、一タカの座席ならよく見えるというんだよ。——安いね。

一度、パニハティに連れていってくれるという話になった。ジャドウの言うには、大勢乗れる田舎の舟を使うんだとさ（一同大笑）。（訳註——田舎の舟の料金はとても安かった）

前には神様の話も少しは聞いていたがね——ある信者はあれのところに入入りしていたが、今はもう行かない。おべつか使いが何人かいつも取り巻いていて、彼をダメにしてしまうんだ。



ほんとに勘定高くて——。わたしが行くと、すぐ馬車代のことを聞くんだよ。わたしは、「心配しなくてもいい。二タカ半出しておくれ」と言うと、そうすると安心したように黙って、二タカ半だけ出すんだ！」（一同笑う）（訳註——ジャドウ・マリックは大金持ちだったが、至ってケチくさかった）

寺の南に土を掘っただけの便所がある。それが元でジャドウ・マリックと寺の支配人との間でもめ事が起こっていた。ジャドウの庭園が隣接していたからだった。

寺の庭園の管理人であるボラナート氏が裁判で免職になった。その通告をうけてから、彼は非常に心配してタクールにそのことを相談した。タクールは、「アダルが副知事だから、あの方がここに見えたらよく聞いてみなさい」とおっしゃった。ラーム・チャクラバルティー氏がボラナートをタクルのところへ連れてきて、彼が解雇されることを心配していることなど、一部始終をお知らせしたのであった。

タクールは心配そうに坐り直して、やおらアダルにこの一部始終をお話しになった。アダルはすっかり聞いてからこう言った——「何でもありませんよ、ちよつとしたことです」タクールは肩の重荷を下ろしたようなご様子であった。

夜が更けた。アダルはお暇いとまのあいさつをした。

聖ラーマクリシュナ「（校長に）——ナランを連れて来いよ」